

「タケオ、起きなさい、おじさんがいらしたわよ」

母がタケオを起こし、タケオは目をこすった。

「今、何時？」

「十二時よ。帰星してやっと、自由時間がもらえたんですって。お土産もあるそうよ」

「本当？」

タケオはベッドからはね起きて、リビングに行った。

おじさんはソファーの上に座ってタケオを待っていた。

「ボウズ元気か？」

そう言って、乱暴に頭を撫でた。おじさんは決して名前で呼ばない。しかし、タケオはまるでおじさんの子供のようにおじさんにそっくりで、おじさん自身もタケオの事を自分の分身のように思っているのだった。

「ほら、土産だ」

おじさんは小さな箱を手渡した。

「何、これ？」

「宇宙ラジオだ。超高性能で、遠い宇宙の果てにある星からの放送も聞けるんだ。つけてみたらどうだ」

タケオは黒いスイッチを押して、ダイヤルを回した。

するとさっそく宇宙人の声らしき音が聞こえてきた。耳を澄ました。

「僕、全然何を言っているかわからないよ」

「そりゃ、仕方がない。言葉が違うんだからな。けれど、長い時間聞いていたら、わかるようになるんじゃないか」

「本当？」

「そうとも」

「兄さん、いい加減な事を言わないで下さい。学校の勉強もまだおぼつかないのに」

「はは、悪かった」

おじさんは大声で笑った。

次の日、タケオが目を覚ますと、おじさんの姿はどこにもなかった。

「お母さん、おじさんは？」

「うん、それがね。また緊急の呼び出しがあって今朝早くに出て行ったわ。また火星にト
ンボ帰りだって」

「そうなんだ」

タケオは残念そうに、椅子の上で足をぶらぶらさせた。

「兄さんも早くこんな危険な仕事から足を洗ったらいいのに」

母は朝食の支度をしながら言った。

「だめだよ。おじさんは宇宙が好きなんだ」

タケオは怒鳴った。

「タケオ……。でも、寂しい人生だと思わない？そりゃ、火星基地の隊員だったら、名
誉はあるけど、生きて戻れるかわからないから、結婚もできない、家族もない」

「僕がいる。それに母さんもいる」

「それもそうね」

母は微笑した。

「あなたはお父さんにちっとも似てなくて、兄さんによっぽど似ているから。だから寂し
くないのかもしれないわね」

そう言って、窓から外を見た。

「はい。はい。ご丁寧にありがとうございました」

母は涙をぬぐいながらテレビ電話に対応していた。

「どうしたの、お母さん？」

電話を切ったばかりの母にタケオは尋ねた。

「兄さんに乗せた宇宙船が行方不明になったって」

「おじさんが？」

「そう。色々手をつくしたけれど、見つからなくて。もう、残された燃料や食料も尽きて
いる筈だから、生きている可能性はないそうよ」

「うそだ。おじさんは生きている」

「私だってそう思いたい。でも、宇宙には空気さえないのよ。生きていると思う方がおかしいわ」

「お母さんの馬鹿」

泣きながら、タケオは外に出ていった。

それからおじさんのお葬式がおこなわれた。第一次火星探検隊のメンバーだったおじさんは、国葬とされ、多くの人々がお別れを言いに来た。

残された家族の一員として、その人々を見ると誇らしく思い、自分もおじさんの跡を継いで、宇宙に行くのが当然と思われた。

その日の晩の事だった。

いつもと同じように宇宙ラジオから聞こえる、はるかな星々の人々の声に耳を傾けていると、かすかに聞きなれた声が聞こえてきた。

「ボウズ、ボウズ、聞こえるか？」

「おじさん、聞こえるよ」

タケオはラジオを両手で持ち、話しかけるように言った。

「ボウズ、ボウズ、聞こえるか、聞こえるか」

「聞こえるよ、おじさん。やっぱり生きていたんだね」

「おじさんは、もう地球上では死んだ事になっているかもしれない。そう、本当に宇宙船の中で凍死する寸前だった。幸い親切な宇宙人に助けられて、その人たちの星に行く事になった。もうラジオの電波も届かない遠い所だ」

「だったらいつか帰ってくるね」

「もう地球には戻らない。お別れだ。さようなら」

「おじさん」

それからは、いくら耳を澄ましても、いくらダイヤルを回しても、おじさんの声がラジオから流れる事はなかった。

それから立派な青年へと成長したタケオは、毎日両親が心配する程勉強に励み、そして、体も鍛え上げ、宇宙飛行士の候補生となった。

「もし火星に行く事になったらどれ位帰ってこれないの？」

「バーでお酒を飲みながら、タケオの彼女は尋ねた。

長い髪が腰まで届く美人だった。天井に星を配したモダンな内装に、彼女のメタリックな服が映えていた。

「さあ、最低でも一年かな。ひよつとすると三年ぐらいいるかもしれない」

「私、寂しいわ。そんなに長く離れているの」

「僕もだよ」

「だったらやめにしない？候補生になる位だったら、他にも働き口がいっぱいあるわよ。それに危険を冒してまでわざわざ宇宙に行く必要なんかないじゃない」

「君は僕の事をわかっていない」

「わかってはいるわよ。どうせ、宇宙に行く方がいいって言うんでしょう。でも何で？宇宙に何があるっていうの？火星なんか、ただの岩だらけの星じゃない」

「おじさんに会いに行くんだ」

タケオは小さな声で言った。

「おじさん？あの宇宙事故で亡くなった？」

「そう。でも本当はまだ生きているんだ。宇宙人に助けられて遠くの星に行っただけなんだ」

「そんなの妄想よ。あなたが勝手に思いこんでいるだけ」

「違う。確かに自分の耳で聞いたんだ。おじさんの声が宇宙ラジオから流れてくるのを」

「だれかがあなたをからかっていたんだわ」

「違う。本物のおじさんだった」

「もうやめましょう。あなた私と結婚したくないからそんな事言っているんでしょ」

「結婚？」

「そうよ。もう付き合って二年もたつんだから、結婚の事、考えたっておかしくないでしょう」

「二人で楽しく時が過ぎればそれでいい、って言ったのは君じゃないか」

「その時はその時よ。今は違う。あなたが遠くに行ってしまったいそうで怖い。あなたを繋ぎとめておきたいの」

「それは無理だ」

悲しそうに首を振った。

「わかった。あなたは火星でもどこでもお好みの所で野たれ死ぬといい。私は知らないから」

彼女はタケオの顔を見たが、無表情のままだった。

「私も真実の愛を見つけに旅に出るわ。誰かさんみたいに妄想にとりつかれていない人に会えるように」

そう言って、彼女は、バーの自動扉から出ていってしまった。タケオは一人、グラスを揺らした。

「お父さん、お母さん、元気でいて下さい」

とうとうタケオが宇宙に行く日がやってきた。

宇宙センターの中にある面会室で、最後の別れを惜しんだ。もう宇宙服を着ている。

「本当に行ってしまうのね。今更だけど」

母は残念そうに言った。

「お前は我が家の誇りだ。行って輝かしい功績を残すんだ」

仕事人間の父は言った。

「お父さん、僕にどんな事ができるかわりませんが、やれるだけの事をするつもりです」

「うむ」

父の目にも涙が光った。

「そう言えば、きのうあなたの彼女がうちに来たのよ」

「彼女？」

「そう。髪の毛の長い美人の女の子。あんな子がいたなんて知らなかった。なんで秘密にしてたのよ」

「いや、ただの友達だから。もう・・・」

「そう？でもあなたに会えなくて残念がっていたわよ。まだ家にいるかと思っていました。謝りたいって言っていたから」

「もう終わった事だから」

「そろそろ出発の時間です」

金属製の扉が開いて、センターの職員がタケオを呼びにきた。

「では、さようなら」

「タケオ」

出ていこうとする息子に母が叫んだ。

「必ず帰ってきて頂戴」

「わかりました」

弱々しい笑みを浮かべたまま、部屋を出ていった。

「万歳」

「我々の未来の為に」

「偉大な宇宙飛行士に」

宇宙船に乗り込む前に、一瞬外に出る通路がある。そこを歩く宇宙飛行士達を一目見ようと、大勢の人たちが世界中から集まっていた。飛行士達が姿を現すと、皆が興奮して叫び始めた。

「タケオさん。ごめんなさい。あなたが帰ってくるのを待っています」

そう彼女が叫んだのも、皆の声にかきけされて、タケオの耳に届かなかった。それでも一瞬だけ通路で立ち止まって、人々に向かって手を振ったのが、せめてもの慰めだった。

「ほう、めずらしい物を持っているじゃないか」

宇宙船の艦長がタケオの持っているラジオを見て言った。

「あ、はい。これはおじさんの宇宙土産なんです」

「君のおじさんの事は聞いている。何でも第一次探検隊の一員だったそうじゃないか」

「そうです。ご存知なんですか」

タケオの顔は輝いた。

「ああ、ひどく困難続きの探検だったそうじゃないか」

「はい。おじも行方不明になりました」

「行方不明ね」

急に宇宙ラジオから声が流れ始めた。今まで聞いた事もない言葉だった。

「やはり宇宙にいる方が感度がずつといいようです。地球よりもずつとはっきり聞こえます」

「そのようだな。かえって良く聞こえすぎて困るかもしれない」

「どうゆう事ですか？」

「他の星の連中が必ずしも友好的とは限らないからな。地球人を催眠にかけて支配しよう

とする奴等もいるかもしれない」

「まさか」

「いや、本当の所はどうだかわからないが、一応この宇宙ラジオは生産が中止されているんだ。人類への悪影響を懸念してだ」

「そうだったんですか」

「まあ、用心深い君の事だから大丈夫だとは思いますが、あまりのめりこまないように」

「わかりました」

艦長の行ってしまった後に、タケオは何やら、胸騒ぎがした。

無事火星に着いた一行は、先発隊と交代する事になった。その日の晩は、基地の中で、簡単なパーティが行われた。特別ドリンクと特別宇宙食を食しながら。地上で流行している音楽も流された。

「君らが来てくれてほっとしたよ」

先発隊の一人がタケオに話しかけた。

「そうでしょう。地球から離れて、もう一年。故郷に戻りたくなるのは当然です」

「いや、それはそうだが、それだけではないんだ」

「いったどうゆう事ですか？」

「基地のメンバーが揃いも揃って気持ち悪い夢を見るようになったんだ。足元の地面が溶け出して、自分達が吸い込まれる夢だ」

「まるで、蟻地獄のような夢ですね。それで吸い込まれたらどうなるのですか？」

「それつきりだ。自分達も溶けてなくなってしまうのだ」

「それは気味が悪い」

「そうだろう。そんな夢が毎晩続くのだから、たまったものじゃない」

その晩、タケオは夢を見た。

パーティで話を聞いたからかもしれない。足元が茶色いねばねばした物に覆われ、逃げようとしても逃げられない。そのねばねばが意志を持っているかのように、タケオの足にからみつく。

「助けてくれ」

狭い部屋の中で叫び声を上げた。

「いったいどうしたんだ」

同僚が眠そうな声で言った。

「悪い夢を見た」

「縁起が悪いな。今日は初日だというのに」

「すまん」

タケオは部屋を出て、司令室に行った。そこでは、艦長が寝ずの番をしていた。

「どうしたんだ。君の当番でもないのに」

「ええ、けれど悪い夢を見たので」

「そうか。まあ、こんな荒涼とした土地にいたら、遅かれ早かれそんな事もあるだろう。ここでは常に平静を保つ事が一番大事なんだ」

「艦長はもう何度も宇宙を旅しているんですよ」

「そうだ」

「怖い思いをした事はあるんですか」

「あると言えばある」

「いったどんな事ですか。良かったら、聞かせて下さい」

「そんな大した事ではない」

「それでもいいです聞かせて下さい、お願いします」

「それは私が初めて宇宙に出た時の事だった。私は若かったから、皆の期待に答えて宇宙でのミッションを完璧にこなそうとあせっていたのかもしれない」

「当然の事です」

今のタケオがそんな気持ちだった。

「宇宙船の外のアンテナが壊れて、データをうまく送信できなくなった。艦長がそのまましておくように言ったのだが、私はそれをどうしても修理したくなった。というのも、地上でのトレーニングで何度も船外修理をやったから、実践したくてならなかった。艦長は私が何度もやらせて欲しいというので、仕方なく私の船外修理を許可してくれた」

「それでうまく修理できたのですか？」

「ああ、なんとか修理はできた。しかし、恐怖心でいっぱいだった」

「何かあったのですか？」

「地球外生物さ。まあ、こうゆう表現は平べったすぎて使いたくないが、宇宙人というやつだ。そいつがずっと私の背後に立っていた、いや、浮いていた。私のやっている事を」

じっと見ていた」

「それで？」

「ヤツは何もしなかった。ただ見ていただけ。しかし、生きた心地がなかった」

「そうですか」

「宇宙センターの連中は、宇宙人ははるかかなたの銀河にいるように我々に思わせているが、この太陽系にもうようよしている。どこから来るのかはわからないが。それがわかってからは、とにかくやつらにつかまらないで、生きて戻ってくることだけが私の唯一の目的となったのだ」

「でももしかしたら、悪意はなくて、我々と友好を結びたいと思っている宇宙人かもしれないですよ」

「君は甘いな。わざわざ宇宙の僻地である太陽系まで来るぐらいだ。自分達に役に立つ物を探しに来ているに決まっている」

「役に立つとは、どんな？」

「それはわからん。我々とは全く価値観の違う連中の事だ。何を探しているかはさっぱり見当がつかん」

「そうですか」

タケオは身震いした。

翌日、タケオは火星の探査に出かけた。仕事は、火星のありとあらゆる場所に観測機器を埋め込み、また、できるだけ沢山の試料を採取する事だった。

「俺たちも宇宙人と一緒だ。少しでも役に立つものを探しているわけだ」

「何か言ったか？」

少し離れた場所で作業していた同僚が火星服の中から往信した。

「いや、ただ何でこんな事をしているのかと思っただけ」

「何だ、急に。そんな事言い出して。科学の発展のためにやっているに決まっているだろう」

「それだけか？」

「そうに決まっているだろう。お前、きのうの晩からおかしいぞ。精神衰弱でも起こしているのか」

「いや、そんなことはない。ただ疑問に思っただけだ」

「ここまで来て、そんな事を言う位なら、最初から宇宙飛行士などならなければ良かったんだ」

「それもそうだな。悪かった」

タケオの目の前にはどこまでも赤い大地が広がっていた。

「おじさん。おじさんはいったい何のために宇宙飛行士になったのですか？」

タケオは黒光りするラジオに話しかけた。スイッチは入っていない。

「こんなに宇宙人が沢山いる宇宙に。それに政府の資源探しの片棒をかつがされて、いったい何のために？」

「私は宇宙につながりに来たのだ」

いつの間にかラジオの電源ランプがともり、おじさんの声が流れだした。

「おじさん、やっぱり生きていたんですね。今どこにいるんですか？」

タケオはラジオをゆすった。しかし、声は勝手に喋り続けた。

「私は地球上では、ポウズ以外の人間とは心をおかす事ができなかった。まるで自分がこの世の生き物ではないような、そんな気がしてならなかった。だから、死を選ぶ事もできたが、自分はおわりに宇宙に出る道を選んだんだ」

「おじさん、今どこにいるのですか？火星に来ているのですか？」

「この気持ちは、お前にはわかってもらえるかもしれない。誰とも共有できない心、どんなに親しい人ともわかりあえない気持ち」

「わかります。わかりますとも。それで、おじさんは今は幸せなのですか？」

「これからお前を迎えに行く。場所はツインピークスの間だ。明日の正午きっかりにそこで待っている」

「ツインピークスとはあの二つの頂のことですね。しかし、そこまで行けるかどうか」

「必ず来るんだ」

そこでおじさんの声は雑音にかき消された。

タケオはラジオから流れてくる雑音にいつまでも耳を傾けていた。

翌日目が覚めると、タケオは真っ先に火星服を着込んだ。

そんな姿を見た同僚は目を丸くした。

「いったいどうしたんだ。まだ作業の時間ではないし、第一今日は、君は外の作業にはあ

たっていない筈だ」

「わかってる。ただ着てみたくなっただけだ」

「変なヤツだな。まあいい、俺は朝飯を食べに行くから」

「ああ、行ってくれ」

あたりに人氣がなくなつたのを見計らつて、二重扉をくぐつて基地の外に出た。すぐそこには、観測に使う探査機が置かれている。二人乗りのゴーカートのような代物だった。

タケオはそれに乗り込むと、急発進し、赤い大地の中を走りだした。

「あいつ、とうとう気が狂つたか」

窓から見ていた同僚がつぶやいた。

「畜生、もう進まない」

バッテリーが切れた探査機のハンドルを思いつきり叩いた。

もう基地に戻るところか、前に進む事もできない。

仕方なく、探査機を降りて、赤い大地を歩き始めた。太陽は見えているものの、遠く離れた惑星の事、着用している火星服のバッテリーが切れたら、寒さと酸素不足で命を失ってしまう。

だから、タケオのやっている事は自殺行為と言ってもおかしくなかった。

「やっと見えたぞ。ツインピークスだ」

そしてそのツインピークスにまたがるように、大きな楕円形の宇宙船が空中に停まっていた。

「遅かったな」

火星服に声が届いた。

「それでも朝一番に出たんです。でも途中でバッテリーが切れてしまつて」

「言い訳はいいから、早く来るんだ」

宇宙船から白い光が発射され、それがタケオを包んだ。

タケオは光とともに、自分の体が、運ばれていくのを感じた。

気がつくと、タケオは宇宙船の中ではなく、甲板のような物の上に立っていた。

甲板の外側には、茶色の地面がまるで生き物のようにうねっている。

「夢でみた光景と同じだ」

顔を上げると、あのなつかしいおじさんの姿がすぐ前にあった。

「いったいこれは何ですか？」

「これが、我々の本当の姿だ。我々はもはや肉体を必要としない、魂だけで生きる高等生物だ。肉体がないから、皆が全て平等で、つながっている。究極の至福の生物だ。はやくお前もつながるといい」

「僕にはよくわかりません。肉体がなくて、どうして生きていると言えるのですか。皆が同じで生きてるのが面白いのですか。つながっているというのは、個人がもはや存在しないという事ではないのですか」

しかし、おじさんは目の前で笑っているだけだった。

「答えて下さい、おじさん。僕はおじさんに会うためにここまでやってきたのです」

タケオは手を伸ばし、おじさんの肩をつかもうとした。しかし、空を切るだけだった。

その手の平を見て、泣き叫んだ。

「おじさんはもういない。これはまぼろしだ」

その叫びと同時に、おじさんの姿は消え、足元の甲板も消えた。

タケオの体は、ゆっくりと茶色の地面に吸い込まれていった。

「タケオ、タケオ、どうしたの？ 生きているの？」

部屋の扉を叩く音がして、目を覚ました。

「宇宙センターに行く時間でしょう。今まで寝坊なんかした事なかったのに、いったいどうしたの？」

部屋に入ってきた母が心配そうに言った。

「宇宙センター？」

思い出そうとするが、ひどく頭痛がして、なかなか思いだせない。

それでも、荷造りの済んだスーツケースを見て、自分は宇宙飛行士として、地球を出ていく身である事を思い出した。

「うっ」

ひどく吐き気がする。

「どうしたの。こんな大事な日に限って」

母はおろおろした。

「お母さん、僕は宇宙に行くのをやめます。そのかわり、この地球で、もっと地に足をつ

けて、一個の人間として生きていく道を選択します」
それだけ言うと、ベッドの上で気を失ってしまった。

完